

20世紀初頭のライプチヒ — 植物学者大野直枝のドイツ日記 —

客員研究員 増 田 芳 雄
ライプチヒ大学 Ingeburg Frommhold

はじめに

ドイツが統一されたのは1871年、普仏戦争の結果であった。いわゆる第二帝政といわれる統一ドイツは軍事強国プロイセンを中心として成立し、以後、産業革命に遅れをとっていたドイツはその後進性を脱し、忽ちヨーロッパ1の強国に発展した。軍事の面を見ると、日本の海軍はその範を海軍国である英国に求めたが、陸軍はドイツから学んだ。はじめ日本は、ナポレオンのフランス陸軍を我が国に取り入れようとしたが、1880年代に大山巖をドイツに派遣し、ドイツ統一後のドイツ陸軍の制度を取り入れた。

明治維新以後の文明開化の際に我が国は学問・芸術を主としてドイツから多くを学んだが、それは、ドイツが近代国家としては後進的であったにもかかわらず、哲学・芸術そして医学ではつとにすぐれた伝統を誇っていたからである。明治10年に創設された東京大学は多くの“お雇い外国人”教師を招いたが、その中にはドイツ人が多かった。また、自前の指導者を養成するため、日本政府は多くの留学生をとくにドイツへ送った。また、私費でドイツへ留学する者も多かった。筆者らの専攻する植物生理学の分野でも日本はドイツに学び、多くの若い研究者がドイツに留学した。当時、ドイツ・ヴェルツブルク大学には植物生理学の父といわれたユリウス・ザックス (Julius Sachs) がおり、世界各国から多くの留学生がザックスの教室に学んだ (Pringsheim, 1932; 増田芳雄, 1987; Gimmler, 1984)。日本からも東京大学を中退した長松篤斐がザックスのもとで光合成におけるデンプン形成の研究を行い、1888年に学位を得た。また、助教授の分類学者松村任三も長松に遅れてザックスのもとに赴いたが、学位を得るには至らなかった。ちなみにこの両者は私費留学であった。

長松は選科学生として東京大学を中途退学してドイツ留学したためか、学位を得ながら帰国後学界に受け入れられず、数年間学習院教授を勤めたのち実業界に転じたので、彼が学んだザックスの植物生理学を我が国で生かすことはできなかった (増田芳雄, 1987)。東京大学理科大学に植物生理学講座がつくられ、初代教授となったのは三好学である (増田芳雄, 1996)。三好は、ザックスのもとで助手を勤め、浸透圧などで優れた業績を挙げ、近代植物生理学の創始者といわれたペファー (Wilhelm Pfeffer) のもとに学んだ (Bünning, 1975)。三好のもとで学んだ同級の二人、すなわち大野直枝と柴田桂太も20世紀に入り相次いでペファーのもとに私費で学び、帰国後、前者はドイツ留学のため職を辞して帰京した柴田の後任として東北大学農科大学 (札幌、のちの北海道大学農学部) 教授となり、後者は東京大学に帰り、のちに植物生理化学講座の教授となった。柴田の学問は多くの門下生によって受け継がれ、現在に至って

いる。他方、大野は札幌在任中に病を得て38歳の若さで亡くなり、その門下を養成するいとまもなかった。

前報（増田芳雄、1999；Masuda and Frommhold, 1999）で報告したように、多くの方々の協力によって、大野の生涯とドイツにおいて行った研究の概要を知ることはできた。しかし、植物の屈性における刺激伝達に関する優れた成果が発表された論文はドイツの雑誌に掲載されたにもかかわらず、学界の注目を浴びることはなかった。筆者らが大野の生涯と研究を明らかにしたいと考えたのは、第一にその優れた研究を学界に再認識してほしかったからである。ペファーのもとで、このような優れた研究を行った大野がライプチヒにおいてどのような生活をしていたのかは、現在まで全く不明であった。しかし、今回幸い、大野の長男直一郎氏夫人である大野章子氏の手元に大野直枝がドイツ時代に記した日記があることがわかった。これにはライプチヒ大学植物学教室における大野の研究の様子を叙述した部分はないが、これによって大野のドイツ生活がをなりくわしく知るに至った。

1. 大野直枝という植物学者とそのドイツ日記

大野直枝には一男三女がいた（現在、三女の正子さんが86歳の高齢で健在である）が、長男直一郎氏（60歳で死去）夫人章子さんと直一郎氏次男、横浜市立大医学部教授の茂男氏が最近、大野博士の遺稿などを発見した。章子さんの話では、大野博士未亡人あやのさんが章子さんにその保管を依頼し、それを現在まで内容をあまり知ることなく保存しておられたそうである。そこには手紙類、実験メモ、採集記録、論文原稿、その他、極めて興味ある、そして貴重な資料が満載されていた。筆者らはこれらの資料をくわしく調査したいと考えているが、その中に大野博士のドイツ時代に書き留めた日記の部分を含むノートがあった。このノートを読むと、明治38-40年(1905-07)当時のドイツの様子と日本人留学生の一人であった大野の同地での生活を伺い知ることができる。

大野は広島高等師範学校在任中の明治37年(1904)11月9日、横浜を出発、アメリカを経てドイツへ渡航した。当時、すでに日露戦争が始まっており、おそらく日本から東シナ海、インド洋、スエズを経る欧州航路は停止されていたと思われる。大野が横浜を発った頃は満州で乃木大将の第三軍が旅順攻撃を行っている最中であり、またバルチック艦隊がロシアのリバウ港を10月15日に出航、日本へ向かって航行中であった。大野が太平洋を渡り、アメリカへ向かっているとき、バルチック艦隊はアフリカのフランス領タンジールに寄航したあと、アフリカ西海岸沿いに南下中であったことになる。

遺品のなかにナイアガラの滝の前で撮った記念写真があるので、大野はアメリカ大陸を渡るだけで欧州にすぐに向かったのではなく、途中各地に寄り、1905年はじめにドイツに到達したと思われる。バルチック艦隊が喜望峰を回り、マダガスカルに到着する前であったのであろう。記録によれば、ドイツでの丸3年間の研究生活を終え、明治41年(1909)1月、大野はライプチヒを立ち、スイス、イタリア、フランス、そしてイギリスを経て帰国の途についた（2-3月、リヴァプールから乗船か?）。そして、5月29日に神戸に帰着、この間約4ヶ月余りを費やしている。遺品のなかに各地で撮った写真などがあり、またエルサレムで購入したと思われる植

物標本帳があり、さらに大野が帰国前に出席した会議の記録や知人の名簿、あるいは旅行のメモに用いた別のカレンダー・ノートが残っている。このカレンダーには、セイロンにある植物園を訪問したと思われる記述があるので、大野は帰途はイギリスから地中海、スエズ、インド洋を経て帰国したと考えられる。

大野がライプチヒに滞在した3年間、ライプチヒ市の南部にあるブラウ通りの下宿に住み、下宿の東方にあった植物学教室で研究を行い、その成果をすぐれた論文としてドイツの学術雑誌にドイツ語で発表した（増田芳雄、1999；Masuda and Frommhold, 1999）。しかし、研究の傍らどのような生活をしたかを詳しく知ることはできないが、その一端は一冊の日記風ノートに記載されている内容からある程度推察することができる。また、当時のライプチヒの様子をその記述から推し量ることもできる。

{ライプチヒ市の歴史}

まず、大野直枝およびその師である三好学、大野のあとにペファーのもとに私費留学した東京帝国大学における大野の同級生である柴田桂太、さらに大野の死後、札幌の農科大学の後任となり、京都帝国大学植物学科設立のためライプチヒに官費留学生として派遣された郡場寛（第一次世界大戦のため、渡独が遅れ、ライプチヒ到着の1月30日にペファーは死去した）らが学んだライプチヒについて概観しておきたい（図1）。

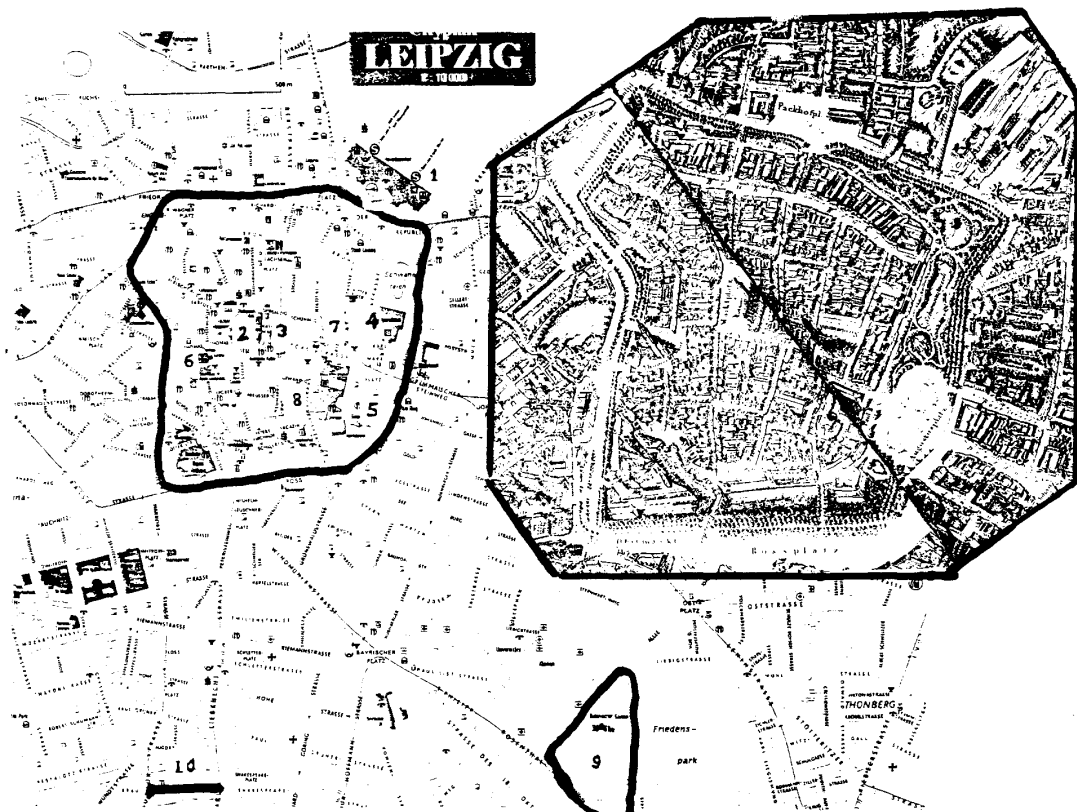


図1. ラウプチヒ市の地図（右上は中心部を示した18-19世紀の地図）。

- 1：中央駅；2：市役所；3：シュテックナー通り；4：オペラ劇場；5：ゲヴァントハウス
- 6：聖トーマス教会（バッハが活躍し、ここで生涯を終えた）；7：聖ニコライ教会
- 8：市立百貨店；9：植物園と植物学教室；10：大野の住居があったブラウ通り。

1015年にライプチヒは要塞として記録に現れたが、12世紀末に都市となり、15世紀には市場都市として栄えた。そして、すでに16世紀はじめには見本市開設の権利を皇帝から与えられた。中世には宗教戦争、三十年戦争がおり、市は包囲、占領されたが、その後経済活動が盛んになり、17世紀に入るや人口が12万に達し（現在は約60万）、18世紀には、“小パリ”と称せられるほど学術・文化の中心地として発展した。そして、19世紀にはバッハ、メンデルスゾーン、シューマン、ワーグナーらの活躍により、音楽の都といわれた。また、ドイツ書籍組合が設立され、さらに革命運動の中心地にもなった。ドイツ鉄道の中心地で、中央駅は1909-15年に建設されたヨーロッパ最大の鉄道駅である（図2）。

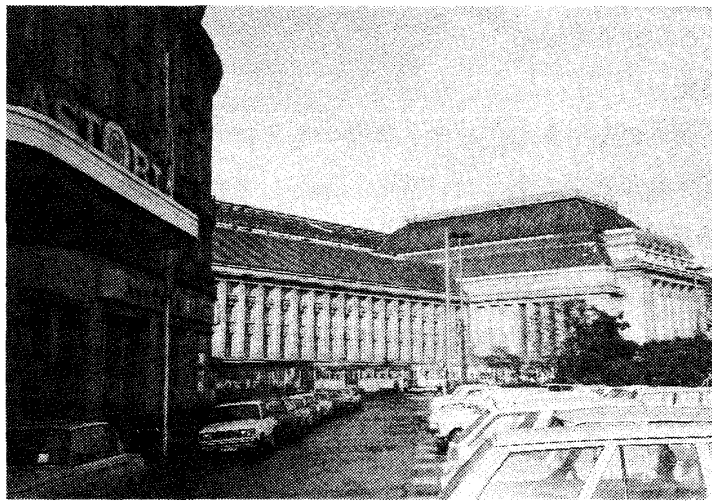


図2. ライプチヒ中央駅（左はアストリア・ホテル）（著者撮影）。

ゲーテら多くの著名人が学んだライプチヒ大学はドイツではハイデルベルク大学について2番目に古い大学である。1409年、火刑に処せられたヤン・フス（Jan Hus, 1369-1415）が原因となり、ボヘミアのフス派の反乱がフス戦争を引き起こした。この戦争を逃れてプラハを去ったドイツ人教授と学生のためにザクセン大公によって設立されたのがライプチヒ大学である。戦後、東ドイツ時代にはカール・マルクス大学と改称されたが、東西ドイツ統一後、再びもとの名に帰った。20世紀に入ってからライプチヒ市の歴史を表1に示しておく。

表1. 20世紀におけるライプチヒ市の歴史

1903年 8月15日	ヨーロッパにおける最初の仏教伝道教会が設立。
1904年10月1日	新市庁舎の地下食堂（Ratskeller）開業。
1905年 1月1日	人口503,637。
10月7日	新市庁舎建設と開業。
1906年	旧市庁舎の再建。
1900-1918年	ナポレオン戦争記念碑の建立。
1914-1918年	第一次世界大戦。
1915年10月1日	中央駅が13年にわたる工事ののち完成。
1933-1945年	ヒトラー政権。
1949年	東西ドイツに分裂。
1990年	ドイツ再統一。この時、聖ニコライ教会でゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者マズール（Kurt Mazur）が非暴力革命を唱えて民衆を指導統一した。

図3に示すように、日記の記述は几帳面な文字で書かれ、ところどころには新聞の切り抜きを張り付け、全体としてかなり客観的に記述している。その内容は、ライプチヒの様子を日本と比較するもの、ドイツ国内旅行の記録、かなり思索的な内容の記述、など多岐にわたっており、彼が多くのことに関心をもち、また孤独な生活のなかで思うことを書き留めたことが想像される。また、世界の人々が大国ロシアと戦う小国日本の戦争に多大の関心をもっていた当時、大野は戦争の最中に國を離れ、祖国の運命が心にかかっていたように受けとれる記述もある。世界は日本の勝利を全く予期しなかった上、ロシアと同盟関係にあったドイツは日本にとって一種の敵国であったので、おそらく日本と日本人に対して偏見と差別意識を持っていたであろう。他のヨーロッパ諸国も同様であったであろう。大野の日記には、日本に対するドイツの人々の認識不足を改善したい、などと彼の愛国心が窺える記述もある。

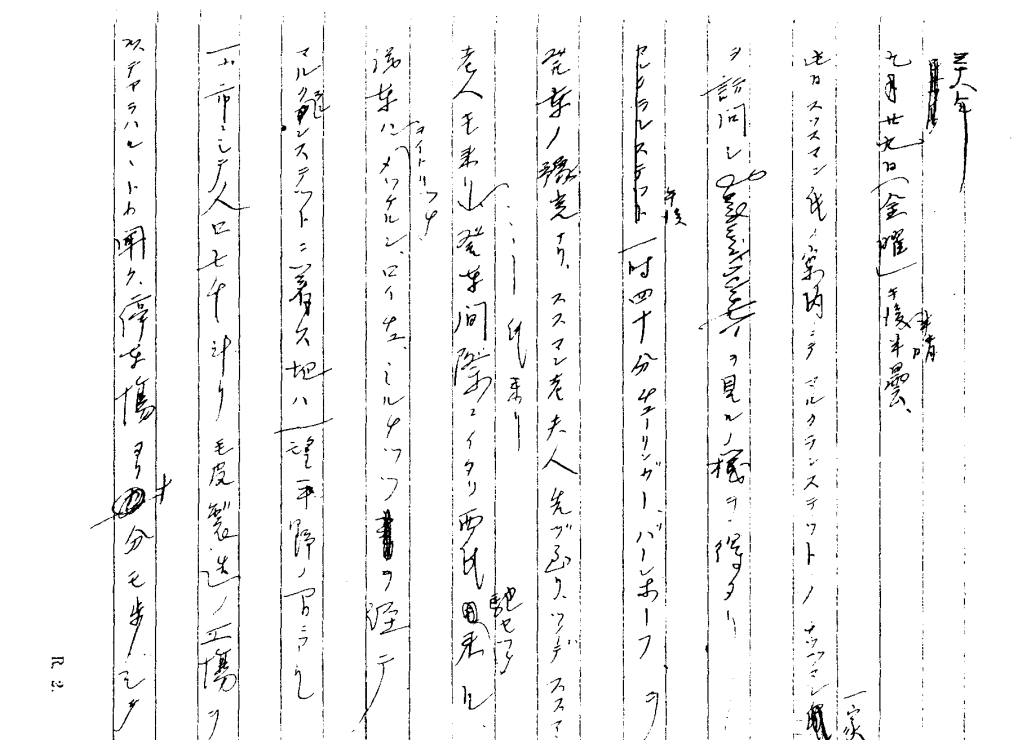


図3. 大野直枝の日記ノートの筆跡。

1905年秋から1906年末にかけて断続的に記された大野の日記ノートは50頁を越える。しかし、この日記ノートには残念ながら日付がほとんど記されていない。日付のある箇所を拾ってみると、大体の記述の時期が想像できる程度である。日付のある部分はどこかを訪問したとき、あるいは特記すべき出来事のあったときが多い。日記ノートの頁と日付のある部分を以下にまとめると：

1905年 9月25日	第2頁
9月29日	5-8頁
10月 3日	10頁
4日	12-13頁
5日	19頁
7日以降	23頁

12月23日	28-29頁
1906年 4月 7日	37頁
10月末-11月初	38-39頁
11月27日	44-45頁

となるので、日付のない部分の記述がおよそいつ頃書かれたものかを推察することはできる。以下、大野の記述を内容別に分類して紹介したい。なお、記述に関し、筆者らの註を*印に番号をつけて説明した。また、大野の日記中の記述は“太字”で示した。

2. ライプチヒ市と周辺

まず、日付はないが、1905年9月25日とおぼしい日にライプチヒ市のことを紹介している(第2ページ、縦書き)。

“来府ノ記(一)”

ライプチヒハ独國ノ商業市ノ重要ナルモノノ一ニ属シ、コトニ書籍商業ノ中心タリ。此地ニハ又独逸帝国ライヒスゲリヒト大審院(*1)、第十九軍団ノ総司令部アリ。又独国最古ノ且最大ノ大学ノ一ヲ有スルヲ以テ著ハル。抑モライプチヒノ名ハフルキWende(スラブ)(*2)ノ漁村LipziモシクハLipskトイフヨリ来レリトカヤ其名ハ菩提樹ノ里ノ様ノ義ナリトカヤ。今モ市ノ一端ヲナセルリンデナウLindenauトハスラブ語ノ菩提樹ノWiese(ハラ)(*3)ト言フ義トカキケリ。

広漠タル平原ノ内ニアル町ニテエルスター、プライセ、パーテ、ノ三川ノ落合フトコロニアタレリ(*4)。プラセアテーンノ名モアリ。(ドレスデンヲエルブフロレンツト称ス)

千九百五年九月廿五日ハジメテ室内ノHeizung(*5)ヲ始メタリ。

新紙ノ報ズルトコロニテハ・・・”

(*1: Reichsgericht; *2: Wendeとは8-9世紀ごろドイツ北、東部に移住したスラブ民族ヴェンド族; *3: “ハラ”とは“原”のことらしい。Wieseとは牧草地などの意味である; *4: Elsterbecken, Pleisse, Weisse Elster. 図4の地図参照; *5: 暖房)

このように、ライプチヒ到着の約半年後からこの日記を記しているが、これより以前に別のノートがあったのかどうかは不明である。しかし、“来府ノ記(一)”とあるので、おそらくこれが日記の書き始めで、到着当初は下宿を決め、学校の登録手続き、研究計画の立案、等々で忙しく、9月になってようやく落ち着いたのであろう。ここでまずライプチヒのことを簡潔に紹介している。

第9頁には「家屋の構造」、「Moebel Wagen(家具運搬車)」とあり、ライプチヒ市の道の舗装のことが書いてある。

“道路ノPflaster(*1)ノ行届ケル事ハ実ニ感ズベク市中ハ殆ンド土ノ肌ヲ露ハサズトイフモ過言アラザルナリ。其種類ハ概ネ左ノ如シ。

人道。シッケイ、敷石、モザイク形。其細カキ事驚クベシ、一々人手ニテナス。

車道。アスファルト、シュラウケンスタイン、切石、木材、シッケイ等ナリ。”

(*1: 敷石、舗装)

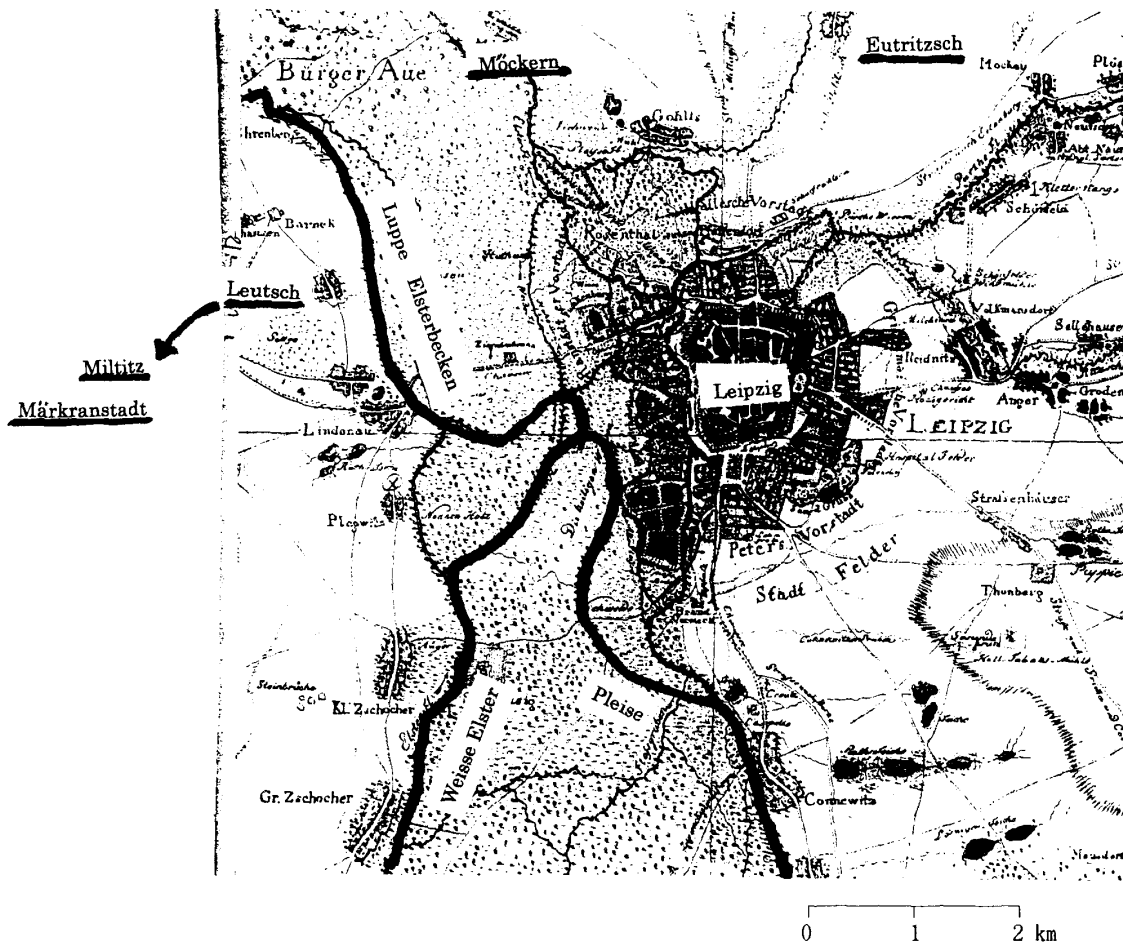


図4. 18-19世紀のライプチヒ付近地図。

当時の日本は道路の舗装は殆どされていなかったのか、道のよく整備されていることは大野の印象に残ったのであろう。

その反面、大野にとってライプチヒは大都会だったのか、あるいは近代化のため東京や広島にくらべて大気が汚れていることが気になったのか、第3-4頁（縦書き）に次のように記している。科学者らしい記述である。

“大都会ノ空氣。

大都会ノ空氣ノ如何ニ不潔ナルカハコレヲシルニ難カラズ、試ニ郊外ニ出テ高所ニノボリテ見バ市街ノ如何ニ穢穢タル空氣ノ底ニ存スルカヲ知ルベシ；コノ不潔ナル空氣ノ衛生上如何ナル結果ヲ有スベキヤモ察スルニカタカラズ。試ニ思ヘ吾人ノ不断無意識的ニ行フトコロノ呼吸ノ際ニ健康ナル大人ノ吸入スルトコロノ空氣ノ量ハ一呼吸毎ニ約二分一リートルナリ。即チ毎分八「リートル」ナリ。二十四時間ニツキ一萬一千五百二十リートルトナル。其重量ハ十三キログラムニ達ス。シカルニ健啖家、強飲家モ三十キログラム以上ノ固形流動食物ヲトル事ナルヲ以テ空氣ノ性状ノ重要如何ヲシルベシ。都会ノ空氣ノ不潔ノヨツテ来ルトコロハ如何。人ハヨシデ烟害トイフシカレル。個ノ外ニ尚諸種ノ混合物アルヲワスルベカラズ。”

次の日付のある記述は10月3日のものらしい（第10頁、縦書き）。すでにライプチヒにはエレベーターやエスカレーターのようなものがあつたのか、次のように書かれている。

“Lift, Rolltreppe

ワーレンハウス (Dry goods stores、デパートメントセーリング)

ベルリンのウェルトハイム、シカゴ及ニューヨーク、シーゲル・クーパー Siegel Cooper、
ニューヨークノワナメーカー John Wanamaker、ロンドン、ホワイトレー、サンフランシ
スコ、エムポリウム。小売商ノ大経営ニナルモノナリ (反対モアリ)

三十八年十月三日毎四時ヨリ (七時マデ) Ury Gebrüder (住宅ハ余ノ寓ノ向ヒニアリ)
ノ開業ナリ。イヨイヨ明四日朝八時ヲ期シ発売スル筈ナリ。勤工場 (広島集産場) ノ如キモノ、
同一経営ノモトニナレルモノナリ。顧客ヲ引クノ施設最モカム、或ハ近傍十哩ノ汽車券ヲワカ
チ以テ近在ノモノヲ吸収ス。小売商ノコレニ反対スル事多シ。

社会ノ現象モ亦一ノ生物学的現象ニスギズト雖モ社会党 (ソシアル・デモクラート)”

10月3日午後、ウリ・ゲプリーバーという百貨店が開業するにあたり、近所の人々に汽車
の切符をサービスして客寄せをし、近所の小売商が反対した様子は、現在の日本でも見られる
現象である。“生物学的現象”という社会現象は生存競争のことを意味しているのであろうか。
この百貨店“ウリ”はユダヤ人経営の店で、ナチス時代になるまでは大変繁盛していたらしく、
著者の一人 (I.F.) の母も戦前にはここでよく買い物をしたという。図5に示すのは1938年の
“ナチス新聞” (11月10日付) の記事で、「このユダヤ人経営のデパートは引き続き閉鎖され
る」とあり、デパートの建物と経営者の写真が掲載されている。この百貨店は1943年の爆撃で
破壊され、再建されなかったという。この市の南にあった百貨店のほか、市内中心部の「新広場」
(Neumarkt) に市立の百貨店 (Städtisches Kaufhaus) があった。これは現存している (図6)。
大野はこの店の顧客であったらしく、この店から貰ったらしいカレンダー・ノート (Merkbuch)
に、ドイツ滞在末期の学会出席メモ、友人・知人の指名、さらに帰国途中の記録などを記して
いる。

次に第12-13頁 (縦書き) に「来府ノ記 (二)」が記されているが、日付はない。あとに10月5日
付けの外出の記録があるので、この「来府ノ記 (二)」は10月3日か4日に書かれたと思われる。

“来府ノ記 (二)

北獨乙ノ平野ノ事トテ一望廣闊山トイフモノヲ見ズ。ライプチヒニ天文台 (ステルンワルテ)
(* 1) ハオストゼーノ海面ヲ抜ク事百十七 (?) メートルナリ。ライプチヒノ近傍一番ノ高
キトコロハローゼンタールノシャーベルベルグ (海拔無慮・・・m) ト称ス。石炭ノ灰モテ積
ミアゲタルモノトカヤ。上ニ木造ノ見晴ラシ塔ヲ設ケタリ。一年ニ二日 (四月ト八月ノ中、太
陽ノ位置適当ナル中、日ノ正ニ地平セントスル後ヨリ太陽ノ照射ニヨリテ「ハルツ」ノ山 (*
2) ノブロッケン山 (* 3) ノ頂ノ転地ヲ接吻スルノ際ニノゾムヘシ。ナポレオンスタインノ
付近・好事家ノ杖ヲ曳クモノ多シ。以テ山ノ珍シキヲシルベシ。

(* 1 : Sternwarte ; * 2 : Halleの西、Göttingenの東、Goslarの南に東西に抜がるHarz 山
脈のことで、鉱石産地として古くから知られる。また、魔女の山としても知られる。 ; * 3 :
Brockensはハルツ山脈の最高峰 {1142m} で、麓には木組みの家で知られる町Weronigerode
がある。ブロッケン山頂にはドイツ軍、第二次世界大戦後にはソ連軍の施設があつて立入禁止
であつたが、最近解放された)

Die jüdischen Geschäfte bleiben geschlossen



Die jüdischen Geschäfte bleiben geschlossen

Leipzig, 10. November.

Auf Anordnung des Polizeipräsidenten bleiben die jüdischen Geschäfte zur Aufrechterhaltung von Ruhe und Ordnung bis auf weiteres geschlossen.

Ausschnitte aus der Nazipress

図5. ユダヤ人経営の百貨店“ウリ”の閉鎖継続を報ずるナチスの新聞記事（1938年11月10日）。



図6. ライプチヒ市の市立百貨店（現存のもの、筆者写す）。

10月7日のことが述べてある部分は（第23頁）、それ以後のある日に記したものであろうが、新しい市役所が開庁されたこと（図7）、これに関しライプチヒの人間について観察したことを以下に書いている。

“町ノ並樹ハ未ダ葉ヲフル事ニ至ラズ候ヘ共、去七日ハ新築ノ当市庁ノ開庁ナリキ。此日ハ天気誠ニ不宜候ヒシモ サクセン王(*1)ノ来市有リ。市中一般ニ賑ヘ所々ノ建物ニハ旗琉(-)ヲ立テスラネ、窓ヨリハ毛氈ヲ垂ルル事カカルハレノ場合ノ風習ニ有シカ。夜ニ入りテハ Illumination ナドコレアリ候ヒキ。

当地ノ風俗モハジメ異様ニ感じタ事ニ(・・)シテモ何ノ感じモナクナリ、神経モ鈍クナリ候事ナリ。中々内部ノ色々ノ事情ナド観察デキルモノデナイ。細カキ事ニツキテハ色々目ニツキタル事モアレモ夫等ハゴク皮相ノトコロデ…



図7. ライプチヒ市役所（筆者写す）

人間ノ大小其他差甚ダシキ事、寸尺ニツキテモ非常ナル大男モアレバ火箸ノ如キモアリ。此差ハ日本ニモ無論アルモ一層甚シイ様ナリ。毛髪ノ色ニツキテモ、キハメテウスク、麻ノ如シ。金髪ヨリシテ栗色、褐色、黒髪トイフ様ニ非常ノ変化ガアル。日本人ノ髪ノ如ク、漆黒ナルハ殆ンドナシ。眼ノ色ニツキテイフモ其変化ハ非常ナリ。精神上ノ点ニ於テモコノ種類ガ多クハナイカト思ヘレル。一言デ申セバ変化ノ幅ガヒロイ様ヲモハルル。

九月末十月ノ始めニナレバAustern(Oyster)ガ出テ来タガーDozen (和蘭) MK3.00。我々ノ食膳ニ上ラズ。ソゾロニ広島ガ思ヒ出サレル。”

(* 1：ライプチヒはザクセン |Sachsen| 州にある。州都はドレスデン |Dresden| である。アウグスト強力王 |August der Starke| が治めた)

3. 大野の生活

10月5日付けで(第19頁、横書き)以下の記述がある。

“十月五日

此日Weststrasse 4 pt. ノSteckner (* 1) (木材商会) ニ西氏ト共ニ赴ク。此商会モトヨリ木材ヲ主トシテ取扱フ事ナルモ其傍日本美術品ヲ取扱ヘリ。即チ象牙彫刻品、Bronze赤(一)銅細工、陶器、木ボリ等ナリ。陶器ニテハサツマ焼、真葛(* 2)ナドアリ。真葛ノ如キ漸次高価トナリ人漸クマイセン製ノモノヲトラントスルニ至レリトイヘリ。”



433 Stecknerpassage, Leipzigs älteste Ladenstraße zwischen Petersstraße und Thomaskirchhof.
Historisches Foto. Um 1900

図8. 1900年頃のライプチヒ市の繁華街シュテックナー(Steckner)

(* 1 | 図 8, 1900年頃 | : ライプチヒ中心の屋根付商店街で、ゲーテが「ファウスト」の構想を練ったというレストラン、アウエルバッハケラー {Auerbachkeller} などがある。1943年12月4日に爆撃で破壊されたが、戦後復興し、現在もほぼ同様の状態にされた； * 2 : ?)

材木店に再び「西」さんと同行している。この店は日本の美術品も扱っていたそうで、そのため、大野は西氏とこの店を訪ねたのであろう。日本の陶器が高くなったので、マイセン陶器を人々が買うようになった、というのは現在から見ると面白い。

続いて9月29日の日付（第5-8頁、縦書き）で以下の長い記述がある。

“三十八年九月廿九日（金曜）午後半晴半曇

此日ズスマン氏ノ案内ニテマル克蘭ステットノチンママン一家ヲ訪問シ Landwirtschaft (* 1) ヲ見ルノ機ヲ得タリ。午後一時四十分チューリンガー・バーンホーフ (* 2)、ヲ発車ノ予定ナリ。ススマン老夫人マズ至リ、ツイデスマン老人モ来リ、……氏モ来リ、発車間際ニイタリ西氏馳セツケ来ル。汽車ハライトリッチ、メッケルン、ロイチュ、ミルチッツヲ経テマル克蘭ステットニ着ス (* 3, 図 4)。地ハ一望平野ノ間ニアリシー小市ニシテ人口七千斗リ毛皮製造ノ工場ヲ以テアラハルルトカ聞ク。停車場ヨリ十分モ歩キテ邸宅ニ達ス。Frau Zith. 氏 (* 4) 出デ迎ヘ家ニムカヘ入レ、座サダマリ珈琲ヲ供セラレ息 Herr Zith. 氏ニモ面会ス。活発ナル廿歳許リノ青年ナリ。Africaニ Colonieヲ有セリト。質素ナル室ナレトモ有福ナルクラシナルベシ。Bauershofe (中庭) ハ七面鳥、雉ヲ多ク飼養シ、甜菜ノ葉山積セリ。蓋シ「ツッター」飼料トシテ良好ナルモノナリ。傍ノ家ニ入レバココニハ良馬数頭ヲ飼養シ、隣室ニハ牛ヲ多ク飼養シ、生レタテノ子牛 (コウシ難字) ナド可憐ナリ。又其隣リニハ豚 (右だけ) ヲ多ク養ヘリ。小屋ノ屋根ニハ鳩、鴿) 多クイコヘリ。後園ニハ泉水ヲホリ、鶏、アヒル等スメリ。芝生アリ、果樹アリ、更ニ後方ニ出レバPromnadeアリ、果樹ヲ並木トス。コレヲコヘテGärten (* 5) ナリ。区画ヲモウケテカシツケテ居ルモノノ如シ。Birnen (* 6) ハ草花。野菜ナド植工付ケタリ。前ノBauerhofニイタルニ二頭立ノ馬車一、一頭立ノ馬車一基ノ用意シ (イズレモ御手ノモノナリ) 郊外ニ馳走ス。一望広漠タル平野ハ多ク畑ニシテ時恰もKartoffel Ernteニ際シタルヲ以テ所々ニ火ノ手アガレルハKartoffel (* 7) ノ葉ヲヤクナリ。チンママン氏ノGute (* 8) ニ又Leute (* 9) ノハタラケルヲ見ル。Zucker Rübe (* 10) ハキハメテ多シ。イズレモ肥厚シテ畑ニノコレリ。其他Rote Klee (* 11) ハGutter (* 12) トシテツクレルモノナリ。或ハ Kohl (* 13) ヲツクレルトコロアリ。ナタネRuebsen (* 14) ヲツクレルトコロナリ。本邦ノ畑トコトニシテ区画キハメテ大ナリ。本邦ノ園芸場ナルト大ニ異ナルナリ。小ジムマリトセズ、「ミルチッツ」ニ出ズ。ミルチッツハカッテ植物Excursionノ際来リタル事アルトコロニシテ、ココニハSchimmel und Co. ト言フ揮発油製造大工場アリ。

煉瓦石造ノ大工場アリ、ソノ近隣ニハ広大ナル薔薇畑アリ。又役員ノ住居ニアテタルVilla風の社宅並び五戸、Gartenstr. (* 15)、Rosenstr. (* 16) ナドノ街ナシ。自カラ一部落ヲ形成セリ。工場付近ハ Ölturische Öle (* 17) ノ芳香ヨークベクアリ。Landstrasse Chanssee (立派ナル街道ナリ。スベテ下ニ石ヲイレタリトカヤ) (* 18) ヲハセテ再ビマルクテレストットニ帰り、Abendbrot (* 19) ヲ饗セラレテ談話ニ時ヲウツシ、七時過停車場

ヨリ汽車ニ乗ジテ華府ニカヘル。此行ハLandhei- (?) (*20) ヲ見タル一例ナリ。農家經濟ノ如何ヲ知ルヲ得。”

(* 1 : Landwirtschaft = 農場 ; * 2 : Thüringer Bahnhof ; * 3 : Eutritzs, Möckern, Leutsch, Miltitz, Märkranstadt ; * 4 : ツイター夫人 = Frau Zither ; * 5 : Gärten = 庭 (複数) ; * 6 : Birnen = 梨 (複数) ; * 7 : Kartoffel = ジャガイモ ; * 8 : Gute = 地所、莊園、農場 ; * 9 : Leute = 人々 ; * 10 : Zucker = 砂糖、Rübe = ニンジン ; * 11 : Rote Klee = 赤 (?) クローバー ; * 12 : Gutter (?) ; * 13 : Kohl = キャベツ ; * 14 : Rübsen = アブラナ ; * 15 : Gartenstr = 公園通り ; * 16 : Rosenstr. = バラ通り ; * 17 : Örturische Öele = 芳香油 (?) ; * 18 : Landstrasse Chanssee (通りの意味不明) ; * 19 : 夜食 ; * 20 : * 1 と同じか ?) 。

この小旅行に同行したズスマン氏 (Sussmann) という人物は、のちにも日記に現れる商人で (第22頁)、大野と個人的に親しかったらしく、別の旅行手帳 (市立百貨店から得たカレンダー・ノート) にある人名録にもその名がある。又、西という人物はライプチヒ在住の日本人で、大野と親しくしていたらしく、他の箇所にも現れる。この小旅行ではチューリンガー駅 (Thüringer Bahnhof) から Eutritzs, Möckern, Leutsch, Miltitz を経て Märkranstaedt へ行っている (図4参照)。このチター氏は大農家らしく、大野の描写は詳細にわたっている。またシンメルという工場があって、関係者の住宅など、近辺のことも詳しく述べている。ドイツの郊外の農場や工場が珍しかったのが、“此行ハLandhe--ヲ見タル一例ナリ。農家經濟ノ如何を知るを得” とある。Landhe-- という語の後半は判読できなかったが、多分 Landherrschaft (貴族に次ぐ階級の人々の莊園) であろう。

9月末から10月になると蛸が出回るが、高くて口に入らず、任地の名産が懐かしく思い出される、というくだりは実感が現れている。

1906年の次の記述 (第38-39頁、縦書き) は早くも秋になっている。研究でいそがしかったのであろうか。

“頃ハ十月ノ末十一月ノ始メデアル。

余ハ夏ハ九時半頃迄實驗室ニ立ツメテ仕事ヲシテ (*1)、クタビレテカヘリ、ゲワントハウス (*2) ノ隅ノハンネスデ夜食ヲシテ家ニカヘッタ。机上ニ夕刊ノ新聞ガキテイテ、室ハ数日前カラハイティング (*3) ヲシテアルノデ外カラハイルト実ニ暖カイ。点火ヲシテソファノ上ニ横ニナツテ新聞ニ眼ヲトウシタ。家ノ娘ハ未ダカヘラヌ。家ノ主人ト御髮 (*4) トガ娘ノカヘルノヨマツテヨル。

九時半ゴロニナツタラ遠クヒビクドロシュケ (*5) ノ響ガスル成ル程今日ハ木曜ゲワントハウスノ音楽ノスندگانノ見エル、ト考ヘテイルト窓ノ下ノ欄干ヲ杖デタタク音ガスル。シャルシー (*6) ヲ引キアゲテ窓ヲアケテ瓦斯燈ノ光リニスカシテ見ルト……氏ダ。窓ヲアケテヤーマーハイリタマヘトイヘバコレカラ散歩ニユクツキアイタマヘトイフ。ヨシト外套ヲマトツテトビダシタ。先刻ヨリハスコシ寒サガマシテキタ。

町ノ両側ニアルプラタヌスハスデニキバミテ落葉ガ電車ノ軌道ニヨチテ電車ハ非常ニ火花ヲ散ラシテ走ル。時ニ天長節 (*7) ニ大使館ノ宴会ニ参列スルカ。町ノ方ノ天ハ紅クヤケテ

町ノ中央ノ方角ヲサシテイル。我々ハ別ニドコトイフアテモナク、自然足ハコノ方角ニ向ツタ。

家ノ娘ガ今年ノ冬ハ舞踏ノ稽古ヲ始ムルトノ事ハ前年来ノ事デアッタガ’（前年ハ男ノ数不足ニテ成立シナカッタイフ）待ニマツタ稽古ノ日モ十月十八日カラ始マツタノdeal。初メハ男ハ男、女ハ女デ習フノdeal。礼式、作法、ヨナラフ次第deal。月末カラワイナハトマデノ日曜ハ男生ハ女生を訪問スル習ハシdeal。即チ多々二人三人ツツ組ヲナシテ十二時前後ヨリ一時半位マデ訪問ヲスルナリ。山高、ギムナジウム（* 8）ノミュッツェチリンダー（* 9）ノモ色々アル。十三人ノ訪問デハ縁起ガワルイ。此上誰モ」コネバヨレガチリンダーヲカブッテ外ヘデ、電鈴ヲオス事ニシヨウ、トイッテイルト電鈴ガナッテアトノ御客ガ続々トクルトイフ有様。皆名刺ヲ一枚ツツ差出ス例deal。”

（* 1：植物学教室は図1の9の位置、10の位置のブラウ通りの下宿から通った；* 2：Gewandhaus＝ライプチヒの有名な管弦楽団でメンデルスゾーンが名声を確立した（図1の5の位置）；* 3：Heizung＝暖房；* 4：女将のことであろう；* 5：Drotschke＝辻馬車；* 6：Jalousie＝巻き上げ日除け、ヴェネシアンブラインド；* 7：明治天皇の誕生日、11月3日；* 8：Gymnasium＝大学へ進学する人のための高等学校；* 9：？）

この部分はライプチヒにおける大野の生活の様子がよく表されており、大野という人が身近に感じられる。彼自身はゲヴァントハウスに演奏を聴きに行く機会があったのかどうか、興味が持てる。しかし、ゲヴァントハウスについて独文で書いたものがある（第48頁）。

“In Leipzig ist die Gewandhauskonzert sehr berühmt. - In Winter-halbjahr, jeden Donnerstagabend um 8 wird es in Gewandhaus die erste Klasse Konzert wie sie überhaupt gibt gehalten. Am vorigen Tage nämlich Mitwoch 11-12 Uhr wird die Probe gegeben.

Der Name Gewandhaus stammt daher, dass die Konzert früher in Gewand Gässhe im Kaufhaus gehalten wurde, wo die Gewänder verkauft wurden, und heutzutage, wo das neue Konzerthaus gebaut worden ist, ist der Name mit übertragen. Der Name ist ablerauch (?) ohne Bedeutung, wenn man so auffasst, dass die Gewänder hier gezeigt wurde.

Diejenigen die hier besuchen haben leider nicht so viel richtige Musikverständnisse aber lauter. Die Gala Toilette zu zeigen—（ライプチヒにおいてはゲヴァントハウスの演奏会は有名である。冬季の半年間、毎木曜日の夜8時からいつも一流の演奏会が開かれる。前夜、即ち水曜日の11-12時には総練習が行われる。ゲヴァントハウス（衣服商店）という名は、昔、衣服が売買された大商店の道で演奏会が開かれたが、現在その場所に新しいコンサートホールが建てられた。しかし、名前はそのまま受け継がれた。ここで衣服売買を示したことを意味するこの名前は意味はない。ここを訪れた人々は残念ながら十分に正しい音楽に対する理解を持っていない、ただ大声で・・・{筆者註：上記のように、騒がしく道を通るからか？} 一張羅の盛装を見せるため・・・)

大野が音楽会に行ったかどうかは判らないが、観劇に行ったことは彼の特異とするペン画のスケッチから想像できる。図9は大野がライウチヒ到着後まだ日の浅い1905年4月11日、ゲー

テの「ファウスト」観劇の際に描いた舞台の一場面、とある。

この日記ノートに記された記述のなかで日付のある最後のものは、やはり自分の生活を述べた1906年11月27日の次の部分である（第44-45頁、縦書き）。



図9. 大野直枝が描いた観劇スケッチ、ゲーテの「ファウスト」。

“今日ハ十一月ノ廿七日水曜デアル。（筆者註：以下はひらがな仮名遣いで書いている） 過日来調べ物や書物で忙しく散歩といふと食事の時の外外出する事が少ないので今日昼食後にしばらく散歩しやうと料理店を出ると其足でレンパーレ（*1）の方に向った。いつも散歩といふと何となく其方に足が向くので、実に此両三日は誠に鬱陶敷（しき？）天気で雨かと思へば又お天気でもないのがあった。しかし今も小やみである。寓居を出て二三分を歩み石造煉瓦造のVillaの立並びたる片側町を横ざまに越ると身は既に森の一部にある。樹の葉も殆ど残りなく落ちて幾かかえもある。独逸のシンボル樅の樹の幹、ひねり出た其枝振りが殊に目立ちてみたる。白く塗ったようなかんばの樹華奢なしだれた枝など今更の様に面白く趣がある。これが日本の中部であれば常緑樹が多くあってさびしさは時に減るのであるが此地では一目枯枝のみである。

森の中の手入れのよく行届てをる徑路をあちらこちらと歩を運んで余は池のほとりに出た。ふと目にふれたのは向側のいつのまにか建てられた水滑りの小屋である。其も道理十一十一月の末であった。池の凍るのを何時でも待受けているので、青年男女が相携へて右往左往特意の曲線を描くのも決して遠くはない。時のたつこの早いのに余は今更驚いた。吾は何をしたのであろうか。

歩を転じて再び森林中に入ると赤頭巾をかぶりたる丸々とした老媪と其つれ合いの老爺と

が熊手をこって厚く地にしける黄葉をかきあつめている。森のはじから川端に出て土手の上に歩を運んだ。しなやかにたれた樺の枝、白塗りの幹、斑にはげたプラターナス、エッシュ、—— 直なるロッシカスタニエレの枝、樹の上にかかる鳥の巣趣をなしている。樹の間を行くと、折柄、雲の薄いところから日がもれて並木のきばめて淡き影が足下にうつった。間もなく日照がまして森を越して遠く彼方に聳え立ちたるラートハウス(*2)の塔の頂にある金色のかざりがまばゆく迄にかがやいたかと思う間もなくおしや雲がかかってしまった。空の景色がややあやしくなった。一しきりはげしく雨がふりそそぎ、余も歩を家路へ向けていそいで歩いた。しばらくして家にかへってみると机の上に日本からの葉書が二ひら。此頃は四時ともなると室内に燈火をともしねばならぬ様な始末。其代り夏は九時半頃迄も燈火なしに新聞がよまれる。昼飯のドイッチェス・ビーフステーキが甚だ塩辛かった為渴を覚えて来た。麦酒をのませる為の料理店の政略にも困る。”

(*1 近くの谷か? ; *2 =Rathaus, 市役所)

さすがに植物学者らしく、自然描写が優れており、絵がうまかったせいか、自然描写が絵画的ともいえる。ライプチヒ滞在も半分が過ぎ、時の経つことの速さに驚き、今まで何をしてきたのかと自省している。

ライプチヒの年中行事を第24頁にまとめて記している。

“華府年中行事

- 一日 新年 **Prosit Neujahr**
氷滑り **Schlittschuhlaufen**
- 廿七日 **Kaisersgeburtstag (*1)**
Gesellschaften (Schüler-Baelle) (*2)
(Frühlingsrennen) (*3)
- 二月 **Maskenbälle (*4)**, **3-Wochen vor Ostern (*5)** マデオドリ得ベシ。
- 三月 **Vor Osten (*6)** **Leipziger Messe (Engross-Messe) (*7)**
- 四月廿五日 **ザクセン王誕生日** **メッセ (*8)**
Osten (*9), **Confirmation (*10)**
- 五月六日 **Pfingsten (Tennis, Boat、遊山, Ausflüge) (*11)** ハルツニユクノカ。
- 七月 大休暇(避暑、海水浴)
- 八月 **Fischer Fest. (*12)** **Sommerfrische (*13)**
(Herbstrennen) (*14)
- 九月二日 (?) **Sedanfest (*15)**, **Michaelis (Messe) (*16)**
- 十月 引越シ。 大学総長選挙(Reformationsfest, Rektorwahl)
- 十一月 **Tanzestunde (*17)**
- 十二月 **雪**
Weihnachten (*18)
Sylvester Abend (*19)”

(* 1 : 皇帝の誕生日 ; * 2 : 生徒の舞踏会 ; * 3 春の運動会 ; * 4 : 仮面舞踏会 ; * 5 : 復活祭の3週間前 ; * 6 : 復活祭の前 ; * 7 : ライプチヒの見本市 (卸商品の見本市) ; * 8 : 見本市 ; * 19 : 復活祭 ; * 10 : 初聖餐式 ; * 11 : 精霊降臨祭 (Ausflügeは遠足) ; * 12 : 漁師の祭り ; * 13 : 避暑地 ; * 14 : 秋の運動会 ; * 15 : ? ; * 16 : ミカエリス祭り、9月29日 ; * 17 : ダンスの時 ; * 18 : クリスマス ; * 19 : 大晦日)

北海道に赴任する前の大野は東京や広島ではあまりジャガイモを食べなかったのであろうか、それともドイツでは主食のようにして食べるジャガイモに関心があったのか、新聞切り抜きを添付した次の記述がある。

“馬鈴薯ノ伝来

培養植物転入ノ由来ヲ調べルノハ極メテ興味ノアル問題デアルガ馬鈴薯ノ由来ニツキ下ノ記事ガアツタカラキリヌキトス。

(新聞切り抜き) (筆者註：いわゆる亀の子文字の活字で印刷されている)

1.sten Oktober '05 L.F.

ch.Zur Geschichte der Kartoffel. Über die Einführung und Verbreitung der Kartoffeln sind so viel unhaltbare Angaben gemacht worden, dass es angezeigt erscheint, einmal an der Hand von eingebenden Quellenstudien, die der Kammerherr v. Stieglitz machte, den landläufigen Ansichten entgegenzutreten. Herr v. Stieglitz wiess nach, dass die Kartoffel, aus Südamerika stammend, zuerst 1492 nach Spanien, 1519 nach Italien, 1584 aus Virginien nach England, 1585 nach den Niederlanden und ein Jahr darauf über Italien nach Deutschland kam. Die ersten Kartoffelpflanzen in Sachsen erhielt Kurfürst Christian I. von Sachsen im Jahre 1591 vom Landgrafen Wilhelm IV. von Hessen-Kassel. Selbst 1747 war die Kartoffel noch in den Leipziger Gärten eine Seltenheit. 1647 kam die Kartoffel durch schwedische Soldaten nach dem Vogtlande. 1717 brachte sie Generalleutnant v. Milkau aus Brabant erneut nach Sachsen. 1726 wurde sie von einem vogtländischen Führmann nach Wallroda bei Radeberg gebracht, 1747 um Kesselsdorf angebaut. Im Meissnischen führte sich die Kartoffel erst als Freund in der Teuerungszeit 1770 bis 1771 allgemein ein und erlangte dann über ganz Deutschland immer mehr Verbreitung, so dass sie heute mit als Hauptnahrungsmittel angebaut wird.

培養植物ノIntroductionニツキテハDe Candolleノ書有名ナリ。”

4. 大野の生活——物売り、浴場など

面白いのは日常生活について述べている部分には、野菜や魚などの物売り (10月はじめ)、あるいは浴場などについてが第25-26頁 (横書き) に詳しく述べてある。

“野菜売り、果実売り

野菜、果実、等ノ市中ニ売ルモノアリ。多クハ人車、モシクハ馬車ニテ野菜、果実等ヲ山盛り

ニシ板ヲタテ代価ヲシルシ、ヒキアルキ所々ニトドマリテ鈴ヲナラシ、買手ノキタルヲマツナリ。Kirsche (* 1), Pflammen (* 2) ナド其時々のものを売るなり (* 3)。近在ノ農家ノ婦人ナル事アリ、夫婦者ナル事アリ。”

“魚類ハ甚ダ少ナイ。淡水魚デ申セバ鯉ノ類Karpfen

(鯉ヨリ頭ノ巾セマシ) Schleie, Aal, Lachs (* 4), 等

(* 1 : サクランボ ; * 2 : 不明 ; * 3 : この部分はひらかな ; * 4 : 鯉、鰻、鮭)

大野は風呂好きだったのか、ライプチヒの公衆浴場が珍しかったのか、実に詳細に浴場の使い方を説明している。

“浴場 散髪

浴場モ無論湯屋ニヨツテ夫々多少ノ相違ハアルダロウシコトニゼイ澤ナル温泉場(例ハバカルルスバードノ如キ)、ノ浴場ナド別トシテ ライプチヒ市中ノ通常ノ湯屋ニツキテ述ベテ見ヨウ。尤モコレハ余ノ寓居ニ近カク常ニ通ツタKönigin Carola Bad (* 1) ニツキテデアアル。其他華府ニハSophienbadトカ何Badトカ色々ノガアル。又或人Platz (* 2) ナドニハ市立ノ安値ナ浴場ガアル様デアアルガコレニ浴シタ事ハナイカラ其模様ハシラヌ。

浴客ハ帳場ニアツテ券ヲ買ヒ番号フダヲ受取り待合室ニ入ル。ココニハ腰掛ケ、椅子、ノ外新聞雑誌ナドアリ、又自働仕懸ノ電気ヲ通ズルモノ自働楽器ナド備付ケアリ。一方デ、帳場ノ女電鈴ニテ湯番ニ湯ノ用意ヲ命ズ。其内ニ湯番ガキテ湯ノ準備ノ出来タ事ヲ通ジテクレルカラ、浴室ニ入ルノデアアル。

浴室ハ数多アル事デアアルガ、各一箇ノ浴槽ヲ備ヘアリテ湯番トイッテヨイカ三介ト申シテヨイカ件ノ男ハ浴槽ノ傍ニアル竜頭ヲマハシテ温湯ト冷水トリ混ジテ適宜ノ温度トシテ場合ニヨレバ寒暖計デカキマハス。数度行ケバ加減ヲ覚エテ適度ニ調合シテクレルナリ。ソコデ加減ヲシテ出デイク度ニ番号符ニソヘテ十文ツツモ酒手ヲヤルナリ。Abonnement (* 3) ニシテケバ酒手ヲ加ヘテ一回ノ入浴料丁度ニナルナリ。

戸ハ内カラシメテ置ク事ガ出来ルガ電鈴ガアツテイツデモ湯番ヲ呼ブ事ガ出来ル。

手拭ハ二枚アリテ二重壁ノ銅ノ容器ニ置イテアル。コノ銅器ノ中ハ蒸氣ガ通ハシテアツテ従テ手拭ハ適度ニアタタマツテヨル。

浴槽ハ大理石デ畳シテアリ。浴室ノ床ノモザイクデ畳ミ。栓ヲネチレバ冷温両様ノ水随意ニ出デ来リ。又高ク上ニハ丞露ノ口ノ如キモノアリテ、コレヨリ冷水ナリ温水ナリヲ雨(降)ラシ浴ビル事モ出来ルナリ。Brause (* 4) トイフナリ。入浴時間ハ四十五分トアリ。入浴シ畢レバ、風呂ノ底ノ栓ヲヌキ、着衣シテ出デルナリ。”

(* 1 : カローラ皇后浴場、Badは浴場、温泉 ; * 2 : 市役所前市場か、 Platzはたぶん **Marktplatz** のことであろう ; * 3 : 前払い、予約 ; * 4 : シャワー、現在は一般にドウシェ [Dusche という)

5. 大野の旅行

ズスマン氏と近郊の農場を訪れたり、教室の助手であったクニープ (Hans Kniep, のちにベルリン大学教授) 博士のイエナの実家にクリスマスに招待されたり、あるいはドレスデンで開

かれた学会に出席したり、大野の日記には彼の旅行についても述べられている。当時、ドイツでは鉄道網が発展しつつあるときで、大野は鉄道旅行にも興味があったのであろう。

第43頁（横書き）には汽車賃について説明し、日本のそれと一部比較している。20世紀初めの汽車運賃と現在の運賃、つまり物価の大きな違いがわかる。

“独乙ニヲケル汽車賃 Durchschnittsertrag für / Person u./Kilometer. (* 1)

Deutschland .-

1. Preussisch Hessische Staatseisenbahn (* 2)	2.51 Pfennig (* 3)
2. Badische Staatsbahnen (* 4)	2.95
3. Bayerische " (* 5)	3.12
4. Württemberg " (* 6)	2.71
5. Sächsische " (* 7)	2.78
6. Elsass-Loth " (* 8) einschliesslich (* 9)	
Wilhelm Luxemb. Eisenbahn (* 10)	2.82
7. Deutsche Privatbahn (* 11)	2.89

Japan

für /Person u. / Eng.Meile (* 12)

Staatsbahnen (* 13)	1.53 Sen
Privatbahnen (* 14)	1.47

(* 1 : Durchschnittsbetrag、平均額か、-ertragは平均収入という意味である；* 2 : プロイセン-ヘッセン州国有鉄道；* 3 : ペニツヒ、100ペニツヒが1マルク；* 4 : バーデン州国有鉄道；* 5 : バイエルン州国有鉄道；* 6 : ヴュルテンベルク州国有鉄道；* 7 : ザクセン州国有鉄道；* 8 : アルザス-ロートリンゲン州国有鉄道；* 9 : 一括；* 10 : ヴィルヘルム・ルクセンブルク鉄道；* 11 : ドイツ私有鉄道；* 12 : 一人当たり、1英マイル当たり；* 13 : 国鉄；* 14 : 私鉄)

ドイツは現在はドイツ国有鉄道 (DB: Deutsches Bundesbahn) となっているが、当時はまだ各州の独立性が高かったのか、国有でありながら、州の名をそれぞれつけているのが興味深い。

すでに近郊に出かけた小旅行についても記しているが、当時のライプチヒ付近の駅と鉄道について述べておきたい。

最初のドイツにおける遠距離鉄道は1839年、ライプチヒとドレスデンの間に開通した。以下にライプチヒを中心とした鉄道と駅の開設の歴史を示す。

1839 : ライプチヒ-ドレスデン、最初の鉄道駅ライプチヒ-ドレスデン駅 (図10) は1834年に着工し、1839年に完成した。総工費4百万ターラーといわれる。

1840 : ライプチヒ-ハレーマゲデブルク

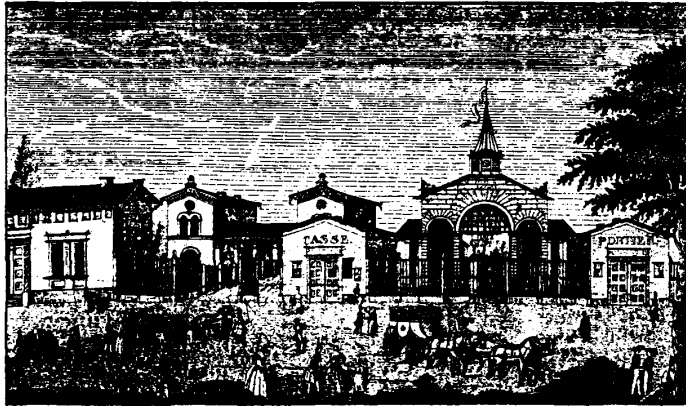
1842 : アルテンブルクまで延長 (バイエルン州国有鉄道)

1856 : コルベタまでのチューリンゲン線が開通し、チューリンゲン駅 (図11) が完成。

1856 : ビッテルフェルトまで延長 (ベルリン鉄道)

1909-15 : ライプチヒ中央駅の建設。ヨーロッパ最大の鉄道駅となった。

当時の鉄道線路は図12に示すようなもので、ライプチヒからベルリン方面、あるいはエアフルト方面に行くにはコルベタで乗り換える必要があり、さらにイエナに行くにはナウムブルクで乗り換える必要があったわけで、大野の日記には“エナ行き”の項（本稿では省略）で鉄道の乗り換えのことが書いてある。



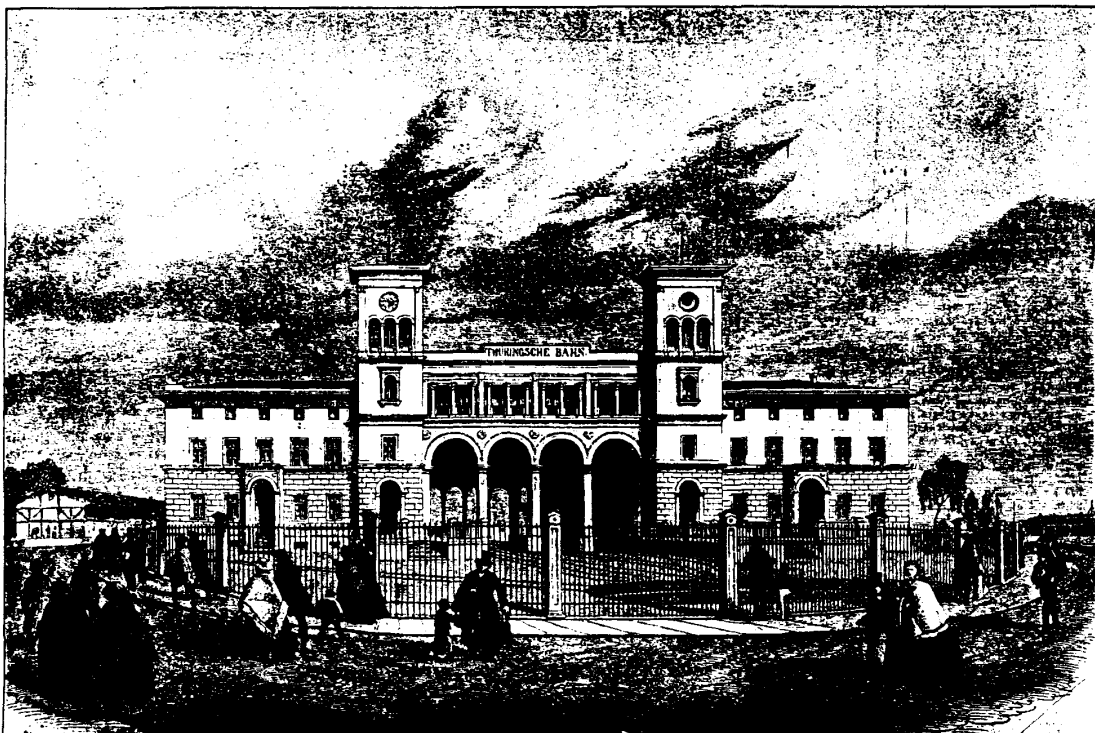
Leipzig-Magdeburg.

Leipzig-Dresden.

Die ersten Bahnhöfe in Leipzig.

Die Bahnstrecke Leipzig-Gallitz-Magdeburg, 1842 die nach Altenburg (Bayrische Bahn) 1859 die nach Bitterfeld (Berliner Bahn) eröffnet. □ □ □

図10. ライプチヒ市の最初の駅（ライプチヒーハレ）。



Der Thüringer Bahnhof.

Die Eröffnung der Thüringer Linie nach Cobetha erfolgte im Jahre 1856. Der Thüringer Bahnhof wurde in unjeren Tagen abgetragen, um Raum für den neuen Hauptbahnhof nach Westen hin zu schaffen. Man verlegte ihn provisorisch nach dem ehemaligen Magdeburger Bahnhof. □ □ □
Im Jahre 1914 wird der Zentralbahnhof, die größte Bahnanlage Deutschlands, vollendet sein. □ □ □

図11. ライプチヒ市の次の駅、チューリンゲン駅。

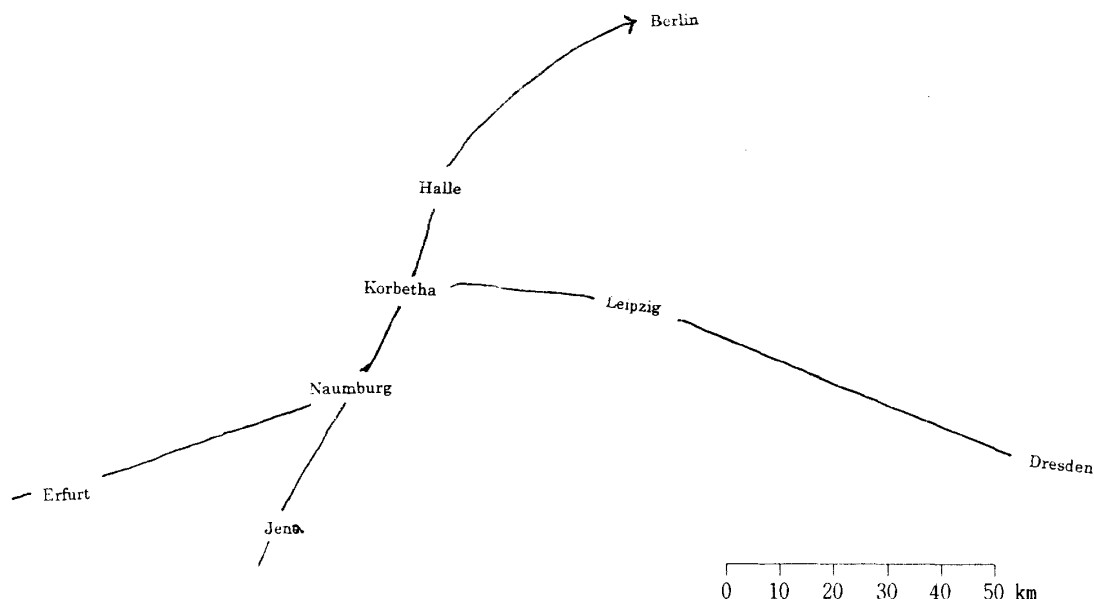


図12. ライプチヒを中心とした鉄道路路。

6. 日露戦争と日独の比較

まず、日露戦争に関し興味ある記述がある（第18頁、横書き）。新聞の日付は1905年9月30日で、日露の講和のときである。

“大山大将ハ「フィンランド」人

日露戦争の始メニアタリ我軍鴨緑江ニ大ニ露軍ヲ破リタル頃ニアタリ、黒木將軍ハポーランド人ナリトノ一説欧州新聞ニ伝ヘラレタル事アリ果シテ然リヤナド尋ヌラレタル事アリ。今ヤ平和ノ締結セラレシトスルニ際シ又下ノ如キ説真面目ニ新聞上ニ上レリ。

=Ohyama - ein Finnländer. Der "L.=U."meldet aus Petersburg: Generalleutnant Korostewzew behauptet, dass der Oberkommandierende der japanischen Armee seiner Herkunft nach Finnländer sei. Noch bis heute wohnen Verwandte Ohyamas in Narwa, die mit dem hohen japanischen Militär in Verbindung stehen. Eines Verbrechens wegen wurde Ohyama von der russischen Regierung nach Sachalin verschickt, entlief von dort und wandte sich nach Japan. Ohyama ist ein finnisches Wort und heisst "Sumpf." (30.Sept. '05, L. T. {*1}Aus aller Welt)"
 (*1: Leipziger Tageszeitung=ライプチヒ日刊新聞)

ドイツの新聞にこのような記事が出る背景は次のようなことと思われる。第1に、当時の皇帝ニコライが言ったように、“猿のごとき日本人”に大国ロシアがただ負けるはずはない、ということ；次ぎに、長年ロシアに侵略され、その支配下におかれたフィンランド人やポーランド人が日本軍を指揮してロシア軍を破ったのであって、日本人が単独でロシアを破ったとは考えられない。当時のドイツの人たちはこう考えていたのであろう。

大野の遺品の中にペン画スケッチ帳がある。その一枚は図5に示した観劇のときのスケッチであるが、これらスケッチの中には興味あるものもあるが、日本海海戦の勝利を喜んだらしく、海軍軍艦旗を描いた一枚がある。また、著名な遺伝学者コレンス（当時ライプチヒ大学にいた。

のちにベルリンのカイザー・ウィルヘルム研究所)の植物採集の様子を描いたペン画の裏には日本海海戦における東郷艦隊を描いたような、水平線上を煙を吐いて航行する数隻の軍艦が描かれており、上に“世界が見た朝鮮海峡における世界最大の海戦”(Seeschlacht Koreastrasse, die grösste Seeschlacht, die die Welt gesehen hat)とドイツ語で記してある(図13)。

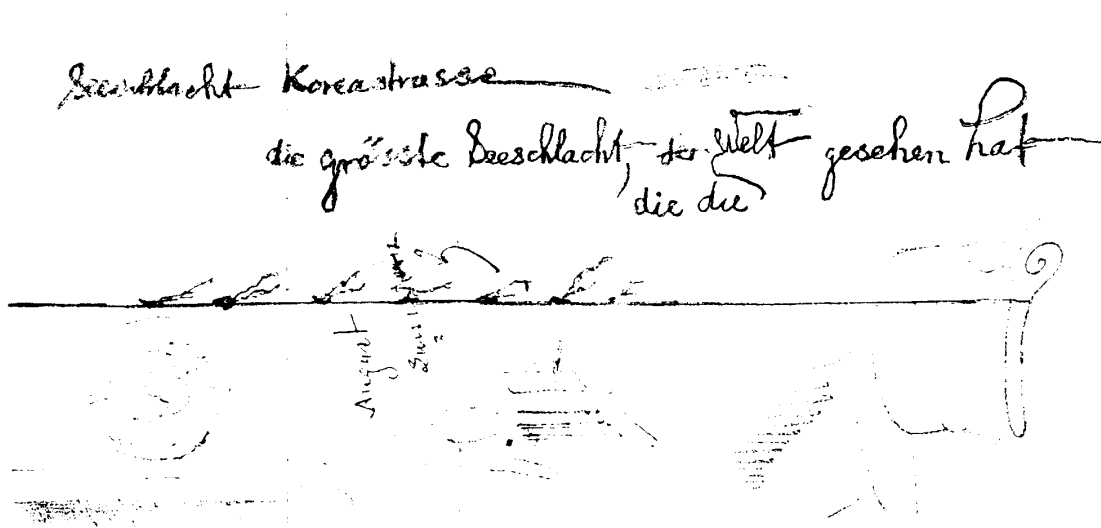


図13. 日本海海戦を描いたと思われる大野のスケッチ。水平線上を数隻の軍艦が煙を吐きながら航行している(水平線の下に8月と書いてあるから、海戦のあった明治38年(1905)5月27日が過ぎたのちの8月に描いたのであろう)。

この記述が書かれたのは、大野がライプチヒに着き、学生登録をし(増田芳雄、1999)、暫くは生活に慣れるためか、観劇をしたり、植物採集に同行するなどの時を過ごしたようである。すなわち、旅順陥落ののち、奉天会戦、日本海海戦が終わり、日露戦争も終結に近づきつつある時期である。大野が日露戦争の成り行きを大いに気にしていたことは想像に難くない。

日本人として外国を見た者の一人としての感慨を述べた部分もある(第33-36頁、横書き)。明治維新後の文明開化から日清戦争、そして日露戦争に勝利した日本を欧州諸国がどのように見ており、また、日本人が先進欧州諸国をどのように見ているか、今後日本人は何をなすべきか、など大野の見識をその記述から窺うことができる。

“本邦ノ人ニシテ年若ク欧州ノ社会ヲ観、見聞ヲヒロクセル事ヲ望ムモノハ極メテ多キ事ナルベシ。シカシテコノ事ハ亦本邦ノタメニ大ニ望マシキ事タルヤ亦論ナシ。シカレドモ見親シク外国ニ遊ビ外国ノ社会ヲ観察シ得ルモノハ本邦青年者ノ一部分ニ過ギザルナリ。シカシテ社会ノ事物タル極メテ多方面ニ渉リ、少数ノ人ノロクニコレヲ見ツクシ得ルトコロニアラザルナリ。各般ノ人士ノ来リテ各長所ヲステ欧米ノ社会ヲ観察セシ事ハノゾマシキトコロナリ。各個ノ自覚ヲ要スルヤ論ナシ。

欧州ノ文物ヲ観ル事ノ要用ナルハ如上ト雖モ其方法ニ至リテハ最モ困難トセザルヲ得ズ。今日交通ノ便開ケ千里隣家ノ如シト稱スト雖モ実ハシカク容易ナルニアラズ。

或ハ商人トシテ或ハ其他トシテ欧州ノ大地ニ遊ブモノ一ナルベシ。大学ニ於テハ米獨プロ

フェッソルノAustausch (* 1) シカレドモココニーノ方法トシテ一顧ノ値アルトコロノモノハイタルトコロ学校ニ於テ本邦風俗、歴史、地理、美術、其他ノ点ニ関シ通俗的ノ講演ヲナスニアリ。

各学校ニ於テ生徒教師父兄ハヨロコンデ歓迎シ其ソハ親シク当地学校ニ教職ニアル人々ノ語レルトコロニシテ其歓迎セラルル点ニ於テハ一点ノ疑ナシ。

欧人ノ日本人ニ対スル智識ノ如何ナルモノナルカハ此地ニアル日本人ハコレヲミル事ヲ得シモ本邦ニ於テハ大多数ガ如何ナル智識ヲ有セルカハシル事ヲ得ザルベシ。コノ誤解ヲサケ日本ヲ敬愛セシムル様ナスハ日本ノ真相ヲ紹介スル事ニアリテ達スル事ヲ得ベシ。

日露戦争ニアリ日本ノ名ハ大ニ高シ。独逸皇帝ハGrossmächte (* 2) トノ称セラレタリ。シカレ共日本ニ対スル独人一般ノ智識ハ実ニスクナキモノナリ。一識者ノ間ニコソ本邦ノ事物ノ講宝ニ関シ意見ヲ有スルモノアリト雖モ 一般ノ人衆ニ至リテハ実ニ幼稚ナルトコロナリ。

シカシテコノ方法ニヨリテ講演者ノ得ルトコロハ甚ダ多カルベシ。観察ニヨリ斯収獲スルトコロノ多少ハ各自ノ力ニヨルベシ。其費用ノ如キハコノ労働ニ対スル報酬ニヨリテ優ニツグノヒテ余マリアルベシ。

試ニ想ヘ。各学校ノ教師、父兄、生徒ハ平均十片 (* 3) ノ金ヲナゲウツ事ヲ喜ニデコレヲ聴カシ事ヲノゾム。Gymnasium, Realgymnasium, Realschule, Bürgerschule, Höheretöchterchule, (* 4) Bezirkschule等各種学校ノ生徒ノタメニ一場ノ講演ヲヒラクトセバ、其際 行燈ヲ用ウル亦可ナリ。其他ノ工夫ハ多々アルベシ。

要スルニ欧州ノ各市ヲ遍歴スルニ要スルノ費用ヲツグノウテ余リアルハ疑ヒナキガ如シ。シカシテ此種ノ事業ハモトヨリ教育ヲ受ケタルモノナラザルベカラズ。又外国語ヲ語り得ルモノナラザルベカラズ。独乙ヲメグルモノナラバ独乙語。

事柄ノ性質上青年ノ教師ニ向テ望ムベキ事ナリトスルナリ。ハジメコソ大ニ困難アルヘシト雖モ漸次其困難ハ去リテ己レノ得ルトコロモ僅少ニアラザルベシ。

敢テ大方ノ意見ヲ問フナリ。”

(* 1 : 交換 ; * 2 : 強国 ; * 3 : 10ペニツヒ、Pfennig ; * 4 : それぞれ、大学進学者のためのギムナジウム、実科高等学校、実家中学校、市民階級のための高等小学校、高等女学校)

これに関連し、第41-43頁にはドイツ各地にどのような大学、専門学校があるかを示す一覧表を記している (第41-42頁、横書き)。

“独乙ノ大学及高等ノ学校

I. Universitaeten

1. Berlin
2. Bonn
3. Breslau
4. Erlangen
6. Freiburg i. Br.
7. Göttingen
8. Greifswald

21. Braunsburg (Lyceum Hosianum)

22. Regensburg (Lyceum)

II. Technische Hochschule

- Aachen
Berlin (Charlottenburg)
Braunschweig
Darmstadt

9.Halle
 10.Heidelberg
 11.Jena
 12.Kiel
 13.Königsberg
 14.Leipzig
 15.Marburg
 16.Münster
 17.Rostock
 18.Strasburg
 19.Tübingen
 20.Würzburg

Dresden
 Hannover
 Karlsruhe
 München
 Stuttgart

III. Tieraerztliche Hochschulen

Berlin
 Dresden
 Hannover
 München
 Stuttgart

IV. Landwirtschaftliche Hochschulen

Berlin
 Bonn-Poppelsdorf
 Hohenheim
 Weihenstephen

V. Forstacademien

Aschaffenburg
 Eberswalde
 München
 Tharandt

VI. Bergacademien

Berlin
 Planstha
 Freiburg i/S

VII. Sonstige Hochschulen

Institut f. Nahrungsgewerbe in Berlin
 Stätische Handelshochschule zu Cöln
 Academie f. Social u. Handelswissenschaften
 zu Frankfurt a. M,
 Handelshochschule zu Leipzig
 Staedt. Höheres Technisches Institut
 in Cöthen

大野はまた、日独の文明を比較している。その幾つかを並べたい（第46頁、横書き）。

“本論ハ余ノ無駄書キデアル。出来ル丈Objektiv (* 1) ニスル様ニツトメタガEindruck (* 2) ナトイフモノハGefühl (* 3) ニ属スルモノデスカラ事ノ性質上ソウモユカヌ。余ノ観察ノ外他ノ日本人ノ観察ヲモ参考ニ供シタガ責任ハ皆余ニ帰スルノデアル。

日本人ノ観察トイフケレノモ、一日本人ノ観察トイフニスギヌノデ、コレガ日本人ノ独乙人ニ対スル日本人全体ノ考ヘデアルト思ハレテハ迷惑デアル。ムシロアル人物好キナ男ガ独乙ニブラブラシテイテ見タ事聞イタ事ヲカキツケタモノトスレバヨイ。

余ノBeobachtungsgabe (* 4) ノスクナイ事ハ余自身シイテアル。カカル企画ヲスルノニ、実ハ大胆スギルノデアル。

独乙人ガ日本ヲ見テ奇ニ感ズル事ハ日本人ガ独乙ヲ見テ奇ニ感ズルトコロト必ラズシモ

Complimentary (* 5) デハナイガ、大ニ参照スル価値ガアル。

抑モ所感ノ如キハ其他ニ礼テナレテシマウト段々ナレル事ニヨッテ段々ト無感覚ニナルノ
デアル。尤モコレニモ「アメリカ」ヲ経テキタ人ト印度ヲヘテ来タ人、トハコトナル。

○其地ニツイタ当時、表面的デハアルガ此時期ニカギリテ感ズル事アリ。

○第二期 コノ時期ニアリテハ事ヤヤ内部ニ入り、ヤヤ真相ニ入ル。

第一期ニヨケルト大ニ意見ヲシル事ヲ得ルニ至ル事アリ。

○其他ヨリ帰朝シテ日本内地ヲフメル中ノ感、コレモ大ニ必要ナリ。”

(* 1 : 客観的 ; * 2 : 印象 ; * 3 : 感情 ; * 4 : 観察眼 ; * 5 : 敬意、賞賛)

日独を対照比較した部分もある(第49頁、縦書き)左列がドイツのことで、右列がこれに対
する日本のことでもないらしい。

“独乙文明ノ性質と日本文明トノ異同

市街ノ模様、集成-Etagenmässige Bau (* 1),

Segmentalorgan (* 2)。

温泉場、世界ノ浴場、

飲食店

外国品ヲ珍重スル事。

往来ニ女子ノ多キ事

独乙機械ノ特質

「プロチェント」セバ如何

体裁ヲカザル事。表面ヲ美ニスル事

日本ニ関スル知識ノ少ナキ事

Schützet G,d(?)astier (* 3)

奇妙ナル名

Beggar ノ事

Böse, Rindpfeisch, Tod,

Mutterlos (* 4)

芸術ノ時代ノ影響ヲ脱セザル事

多キ名。Müller, Schultze等

劇及音楽

何ガ故ニシカク多キカノ間

絵画、彫刻

起ル。

芸術ニ

道路ノ掃除ノ行届ケル事

日本ノ趣味ノ入レル事ハ明ナリ

手入レ

借金証書ニ用ラル実印

ビール、其他ノ飲料

ノカタガ時トシテ美術品ニ用イ

ラルル事ナリ。

Alkoholismus

日本人ノ眼ニモ堂々ニ映ズル事

Trinkgeld(eysten) Militarismus, Hauptmann von Koe(??)

nick” (* 5)

(* 1 : 高層建築 ; * 2 : アパート住宅のことか ; * 3 : ? ; * 4 : 悪人、牛肉、死、母なし ;

* 5 : チップ、軍国主義、?の中隊長)

ドイツ人の慈悲心についてもやや批判的に述べている(第49頁、横書き)。

“Tierquälerei (* 1) 二就テ

独乙ニ於テハ犬猫ノ如キ病ミテ到底回復ノ見込ナキ場合ニアリテハコレヲ毒殺スル事多シ。カヘッテ慈悲トスルナリ。

此頃ライプチヒ付近ローゼンタールノ森デ猫ガ犬ニ追ハレテ大ナル樹ノ頂キニノボリ、犬ノ難ハマヌカレタルモ梢ノ間ニハサマレテ再ビヨリル事が出来ナクナッテシマッタ。久シクタッテ人ノ目ニトマッタガ、ダレモコレヲタスケル事が出来ヌ。森林官ハツイニコレヲ射殺シテシマッタ。即チコレヲ以テ慈悲トカンガヘタカラデアル。”

(* 1 : 動物虐待)

その他、日独の違いに大野は多角的に興味を示している (第50頁、縦書き)。

“顔ノTypeニヨケルParallelismus (* 1) 人種ノ相違ニヨリテ Maskierenセラレタル事ハ明ナリ。

Parallelismus社会ノ同級ニ属スルモノノ氣質ニParallelismusヲ見ル。

{錢勘定ニヨセ算ヲ用ウル事}

日本語ハムシロ眼ヨリ入ル。読書ニヨリテ来ル音ヲシラズシテ形ヲ知レル文字随分多シ。コレニ反シ欧文ハPhonetisch (* 2) ナリ。耳ヨリ入ル事多シ。ココロミニ独乙人ニ向ッテDruck (一?) ノ画 (難カク) ヲ問ヘ。必ラズシラザルモノアラン。

独乙ノBuchstaben (* 3) ハコレヲ廃シタル方便利ナラン。學術上ノモノニハ殆ドナシ。新聞、公文書ノ類独乙語ノゲシュレヒト等ニヨリ意味ヒロクナル事ハナカルベシ。

{寒暖計}

{独乙語ニオケル外国語}

美的ノ本ヨリ来ルカ (コレハ必スシモシカラザルベシ) 保守的ナルニヨルカ国粹保存。

農学reich und schwer (* 4)

{語ノツツカザル中同ジ語ヲクリカエス事 das, das—}

趣味ノヒツコキ事。(Dekoration Kunstニ於テ見ルトコロノ) (* 5) ト関係アルカ。

Dekoration KunstニヨケルModernノ趣味ハSekundäre Vereinfachung (* 6) ト見テシカルベキカ。書籍ノ装丁。

{独乙語ハモトカシツライ。ベヂェルフニ・・ヨリオレリトカ。カカル語ハハナシニハ用イザリシモノトカ聞ク}

欧人 (殊ニ独乙人) ノ眼ニ映ズル日本及日本人ハ大ニ奇 (要?) ナリトナルベキナリ。

富ノ程度ノ差。 Ori—(?)

物価ノ比較。汽車賃、医師の診察料。書生ノ学費。大学卒業迄ノ費用。”

(* 1 : この場合、共通性というような意味か? ; * 2 : 発音どおりの ; * 3 : 文字 ; * 4 : 多彩であるが困難 ; * 5 : 装飾芸術 ; * 6 : 二次的単純化)

7. 大野の友人たちとユダヤ問題

大野の旅行日記にはかなりの数の人名が書いてあるが、その中には植物学者でないらしい人も居る。あちこちに同行している日本人“西”氏については不明だが、その他、親しくしてい

たズスマンという人物がいる（第22頁、横書き）。日本語教えたことで友人になっただらしい。

“当市ニテノ大商人ノ一人ニSusssmannト申ス人アリ。スデニ十数年前ヨリ日本ヒイキニテ六十歳余ナルモ、一週間ニ 二三度先生ノ熱心ニ感じ、Plantト申ス人ノOttoノヨロシキ書出来ヨリ候事故コレニツキ教ヘ居リ候。カタハラ独乙語ノ練習ニモナレバ、日本語ガ習ヒタイトノ望、極メテ真面目。雨天デモ一週ニ三時間程、年少者モ勉強セネバ同氏ハ随分ト熱心外国ニキテヲラルル方ノ時間ノ貴重ナルハシッテヨレバ多分毎週、二三時間ヲトノ事ニテ宅マデ来テノタノミニツキ否シカネ引受ケ申シタトコロ大喜ビニテ宅マデ習ヒニクル事ニコレアリ。

同氏ハ自分ニ語学ノオアリトカアク信ジト見大熱心ニ有シカ、元氣ハ感心ノミカ。

当地昨今ハ既大分寒ク相成申候テ室内モ暖炉ヲタク事ト相成候ガ暖炉ハBerliner Ofen（* 1）トテ磁製ノ方形ナルモノヲ置。朝一回ヨクアタマレル石ノタメヶ月暖氣ヲ保ツモノニコレアリ候。

日モ余程短カウ相成リテ六時ニハスデニ燈火ヲ要シ申候。夏期九時過ニイタルモ尚バルコン楼縁ニ出デテ書見スル事ヲ得ルニ比シテ大分差ヲ生ジ申候。

（* 1：ベルリン・ストーヴ、大型陶瓦製のもの）

新しく開店した百貨店“ウリ”について述べているが、これに関連してかどうか、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義のことについても大野は述べている（第18頁、47頁、横書き）。

“Judenノ事

Juden人トイヘバ或ハ鼻トイヒ或ハ御宗旨トイヒ一種特別ノモノトセラルルナリ。

Juden Frage（* 1）ナルモノ重大ナル問題ナリ。世界各地ニ散在セリ。サレバサダメテ日本ニモ多クノJudeを見ル事ナラント尋ル。”

“Judenfreniノ旅店（* 2）

日本ニモJudenアルベシトノ事ハタビタビキカレタリ。ナシトイヘバ大ニ意外ニ感ゼル人ヲ多ク見タリ。

ユデア（ママ）人反対ノ潮流

Antesemiten-Katechismus. 22版、1892.

Von Theodor Fritsch (Verlag von Theod. Fritsch)

Eine Zusammenstellung des wichtigsten Materials zum

Verständnisse der Judenfrage. 400 Seiten!

ポケット形ナリ

1) Was versteht man unter Antisemitismus?

“Semitismus” bezeichnet das Wesen der semitischen

Resse. Der Antisemitismus bedeutet also die Bekämpfung des Semienthumus.”

（* 1：ユダヤ人問題；* 2：ユダヤ人を泊めないホテル）

ドイツ人に、日本にもきっと多くのユダヤ人があるのであろうと度々訊かれたが、日本にはユダヤ人がいない、と答えると、多くの人は意外に思ったとのこと、興味深い。

大野の死後、札幌で後任となった郡場寛が官費留学でライプチヒへ発とうとしたとき、第一次世界大戦が勃発した。敗戦後ドイツはワイマル共和国となったが、過酷なヴェルサイユ条約による連合国、とくにフランスの圧迫に国民の不満は爆発した。この不満を代弁してドイツを再び強国にしようとしたのがナチスであった。ヒトラー（Adolf Hitler, 1889-1945）は1933年に政権を取り、第三帝国が成立した。第三帝国は「反ユダヤ主義」政策を取り、1934年1月以降、次々と反ユダヤ人政策を実施した。その詳細は他に譲るが（村瀬興雄、1968；上田和夫、1986；大沢武男、1991, 1995；増田芳雄、1996）、ウリなどデパートや店舗の閉鎖など、ユダヤ人の経済活動の停止もその一環であった。この反ユダヤ主義はナチズムに始まったことでなく、その歴史は長い（村松剛、1963；Mosse, 1985）。大野の日記に述べられている20世紀初頭のドイツ人の反ユダヤ感情はその一端であろう。

むすび

日記のうち大野の専門である植物学に関する部分（日本植物生理学会通信第78号、2000）は本稿では省いたが、大野の関心はかなり多岐にわたり、しかも叙述は細部にわたって正確である。19世紀のドイツ留学中の日記としては森鷗外の「独逸日記」が有名で、毎日の出来事を正確に、しかもくわしく記している。大野の日記はこの鷗外の「独逸日記」のように毎日の出来事を詳細に記したという日記ではないが、自らの関心のあることには紙数を割き、自説や感想を率直に述べているから、日記というよりも「備忘録」に近いかもしれない。しかし、内容が多岐にわたり、当時のライプチヒの様子、東洋の小國日本に対する認識やユダヤ問題に至るまで、人々のことがよく理解できる。また、この大野の日記を読むと、単身で遠い欧州にでかけた当時の日本人留学生の好奇心、驚き、批判、淋しさがよく窺える。1880年代にヴェルツブルク大学に留学した松村任三が故郷に送った手紙（長久保片雲、1997）で泣き言を言っているのとは好対照で、大野がドイツで積極的に生活していた様子が窺える。日記の中で、家族を想う記述がないのは不思議であるが、おそらくあやの夫人にかなり頻繁に手紙を書いたのではないかと推察される。

大野は1908年帰国後、広島高等師範学校から札幌の東北帝国大学農科大学に移り、植物学の教授になった。大野に続いてライプチヒ大学ペファー教授に学ぶため、札幌を辞して東京帝国大学に帰った柴田桂太の後任であった（図14）。札幌に永住し、研究と教育に専心しようとした大野は不幸にして病を得、わずか38歳の若さで亡くなった。このため、札幌においては大野の門下生が育つ暇もなかったのはいかにも残念なことである。今世紀が終わろうとする現在、世紀はじめのドイツで生活した大野直枝の日記を読むと、隔世の感がする。

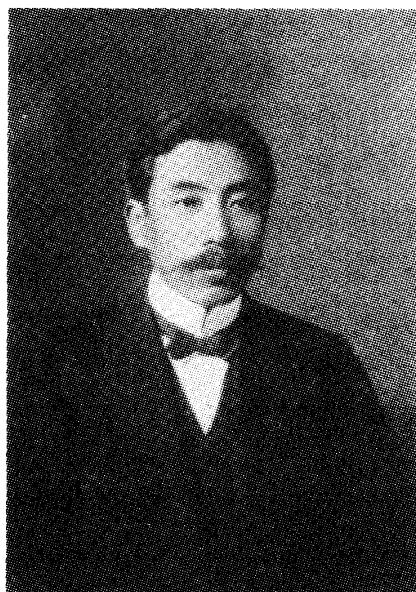


図14. 東北帝国大学農科大学植物学教授時代の大野直枝教授（大野茂男博士提供）。

謝辞

本稿に報告した大野直枝のドイツ日記の公開をお許し下さった大野直枝博士長男直一郎氏未亡人章子さん、直一郎氏次男で横浜市立大学医学部教授、大野茂男博士、および大野家の皆様に感謝の意を表す。また、原稿について意見を下さった岡部昭彦氏にお礼を申し上げる。

引用文献

- Bünning, E. (1975) Wilhelm Pfeffer. Apotheker, Chemiker, Botaniker, Physiologe, 1845-1020. Wissenschaftliche Verlag. MBH, Stuttgart (田沢 仁、増田芳雄、松本友孝、橋本 明訳：分子生理学の先駆者ヴィルヘルム・ペッファー、学会出版センター、1988)
- Gimmler, H. (1984) Julius Sachs und die Pflanzenphysiologie heute. Verlag der Physik.-Med. Gesellschaft, Würzburg (田沢 仁、松本友孝、増田芳雄：植物生理学・栄養学の創始者ユリウス・ザックス — 今日に生きる苦闘と栄光、学会出版センター、1992)
- Masuda, Y. and I. Frommhold (1999) life and work of Naoye Ohno and his contemporaries. JSPP Newsletter 34:11-16, The Japanese Society of Plant Physiology.
- Mosse, G. L (1985) German jews beyond judaism, Hebrew Union College Press (三宅昭良「ユダヤ人のドイツ。宗教と民族をこえて」講談社選書メチエ、講談社、1996)。
- Pringsheim, E. G. (1932) Julius Sachs, der Begründer der neueren Pflanzenphysiologie, 1832-1897. Verlag von Gustav Fischer in Jena.

- 上田 和夫 (1986) ユダヤ人。講談社現代新書、講談社。
- 大沢 武男 (1991) ユダヤ人とドイツ。講談社現代新書、講談社。
- 大沢 武男 (1995) ヒトラーとユダヤ人。講談社現代新書、講談社。
- 長久保片雲 (1997) 世界的植物学者松村任三の生涯。暁印書館。
- 増田 芳雄 (1989) 忘れられた植物学者。長松篤斐の華麗なる転身。中公新書、中央公論社。
- 増田 芳雄 (1996) 日本における植物学の曙。人間環境科学5 : 33-83, 帝塚山学園。
- 増田 芳雄 (1996) 科学者とナチズム — 歴史と反省。帝塚山短期大学紀要33 : 232-249.
- 増田 芳雄 (1999) 大野直枝について。日本植物生理学会通信76 : 22-35, 日本植物生理学会。
- 村瀬 興雄 (1968) ナチズム。ドイツ保守主義の系譜。中公新書、中央公論社。
- 村松 剛 (1963) ユダヤ人。迫害・放浪・建国。中公新書、中央公論社。